

「ハンセン病と差別・人権 六年 総合的な学習の時間」

多摩島嶼地区教職員組合（東村山・北山小分会）

宮澤弘道

1. はじめに

2018年度から小学校において道徳が教科化され、「特別の教科 道徳」として「すべての教科の基盤をなす」位置づけでの授業が予定されていますが、個人の考えを公権力が公権力の価値で「評価」という、およそ人権的にあり得ない教科となってしまうています。また、東京都人権教育プログラムには様々なマイノリティーに配慮した授業実践例が紹介されていますが、そのプログラムの冒頭にこのような一文があります。

「教育活動と政治運動・社会運動とを明確に区別し、——中略——特定の主義主張に偏ることなく教育の中立性を確保する。」

このため、ハンセン病の実践においても、患者の抵抗運動などに触れることはほとんどなく、当事者の思いを捉えるには不十分な実践になってしまっています。また、まともに関しても「今、ハンセン病は治る病気で、感染もほとんどありません。こんな薬で治ります。正しい知識で差別をやめましょう。」のようなまとめになってしまっており、本当の意味での人権教育となっていないません。

そんな中、私自身十年前から多磨全生園とハンセン病資料館で市民や保護者、子ども、教職員など様々な方にガイドをしており、そこで感じたことなどを生かして授業を実践しています。

そこで本レポートではハンセン病についての私の実践での授業展開と子どもたちの反応を紹介する中で、ハンセン病と人権教育について考えていきたいと思えます。

2. 授業展開と子どもの反応（総合的な学習の時間／全30時間）

① 今まで（五・六年次）学習してきた人権課題について振り返る

「障害者（発達障害含む）」、「LGBT」、「路上生活者（ホームレス）」、「
「同和問題」、「アイヌ」、「戦争被害・加害・抵抗」、「公害」

今までの学習の中で、人権問題としても考えることができるテーマについて当時の教材、資料などを使いながら振り返り、改めて人権とは何なのかについて各自が課題意識をもつ。

それぞれのテーマについて以上のような議論を交わしながら、改めて人権について向き合った。その上で、次時より新たな人権課題「ハンセン病」について学んでいった。

②自分の中に眠る「差別意識」に気付く

画家、木下晋さんのハンセン病患者をテーマにしたデッサン画を黒板に掲示し、感想を出し合う。



「この絵を見てどう思いましたか？」

- ・ 気持ち悪い
- ・ 怖い
- ・ 目が一つしかない。
- ・ 全体的に溶けている？

「この絵に描かれているものは何だと思えますか？」

- ・ 日本の妖怪？
- ・ 作り途中の粘土作品。
- ・ もしかしたらこれも人権に関係するものかもしれない。
- ・ たしかにこんな人が実在するなら差別されると思う。

この絵はプロミン登場以前の、劇症化してしまった患者を描いたデッサンであるが、あえて授業のテーマも何も言わずに（この時点では子どもたちは何の時間の授業であるかもわかっていない）この絵を提示することで、自分の中にある差別意識に気付く意図がある。ただ、この子たちは前述したように様々な差別について向き合ってきているため、勘のいい子どもから「人権」や「差別」というキーワードが出てくることとなった。

この後、この絵に描かれているのは人であるということ、ハンセン病という病気にかかってこうなってしまったことを説明した。

③回復者の書いた文章を読み、基礎的な知識を得るとともに、自分なりの学習課題をもつ

桜沢房義さんの著書「全生今昔」より「全生園に入園した日」を読み、問題の所在に気付くようにする。

全生園に入園した日

私が遠い故郷をはなれ、この全生園にやってきたのは、大正時代（今から90年ほど前）のことだった。

その日、父と一緒に朝4時ごろに家を出た。となり近所の人々に病気の姿を見られると大変なので、まだ暗い道を無言で歩いていった。

— 中略 —

ホームに下りると、駅員が警察の人に、「なんだ、こんなクサリボウに、2両もつなげてきて。」と大声で言った。クサリボウと言われて、私は社会から捨てられた人間であることを、はつきりと知らされた。見知らぬ土地に来て、初めて聞く言葉が「クサリボウ」—なんとということだ。これ以上の悪口はない。自分はもう、人間として世間に通用しないのか。

人力車がむかえにきて、私とは別の車両に乗っていた足の不自由な人を乗せた。私は人力車といっしょに歩いて行った。途中で子どもが4、5人遊んでいた。子どもたちは、私たちを見かけると、「ああ、クサリボウ、クサリボウ」とはやしたてた。この地方では、私たちの病気のことをクサリボウと呼んでいるのか。ひどい言葉だ。気落ちして歩いていると、人力車を引いている人が、「向こうに大きな松が見えるだろう。あれが全生園だ。」と言った。東京だと聞いていたのに、まわりに人家もない林の中にあると知り、さびしい思いがした。

この資料を読み、子どもたちは全生園やハンセン病について調べてみたいことを考える。

④⑤⑥ハンセン病という病気を正しく理解するために写真・資料の提示

(1) らい菌の性質について（人間の神経との親和性、分裂時の温度の低さ、菌の繁殖速度の遅さ、非常に「弱い」毒性、非常に「弱い」感染力）

(2) 治療薬について（大風子油↓プロミン↓ダプリン↓MDT）

(3) 患者の運動（プロミン獲得運動、プロミン獲得後の運動、予防法改正運動）

⑦⑧⑨⑩⑪差別の歴史を知る

(1) 全生園での生活（奪われた名前・園内通用券・懲戒検束権・断種墮胎）

(2) 草津に送られた山井道太さんの洗濯場事件

(3) 栗生楽泉園の重監房

(4) 熊本ホテル宿泊拒否事件

(5) 長島愛生園・人権回復の橋

⑫⑬⑭患者の闘いを知る

(1) らい予防法の問題点

(2) プロミン獲得運動からの患者たちの闘い

(3) ハンセン病裁判

⑮⑯⑰⑱⑲⑳実相をつかむ

(1) ハンセン病資料館館内見学／回復者・平沢保治さんのお話会（半日）

○第六学年四クラス百二十八名、送迎バス（無料）による送迎

○平沢さんのお話の概要

・入所時の様子、所内での生活、社会の差別の目、闘いの日々、講演活動の意味。

・子どもたちへ三つの約束

夢と希望をもつこと

「ありがとう」と言える人間になること

奇跡的に一度だけ与えられた命を粗末にしないこと

・テレビに出たりしているような人なのに差別されているなんて驚いた。
・同和問題と同じ悩みだと思った。

・療養所の中にもいじめがあったことを知り、複雑な気持ちになった。

・戦争は命を粗末にする最大のものだという一言が心に響いた。

・死ぬとみんなお祝いする、うらやましますがというのは頭では理解できるけど、やっぱりよくわからない、すごい世界だと思ったし、そんなことあつてはならないと思つた。

(2) 全生園史跡めぐり(半日)

とにかく子どもたちはこの広さに(35万平米)驚いていた。また、入所者にとつては「生活の場」であるため、迷惑にならないように見学するよう声をかけた。

- ・この広さが差別の大きさだと思った。
- ・引き取り手のない遺骨が四千体以上あることが信じられないし、死んでも差別があることがおかしいと思った。
- ・もつと足を運んで、仲良くなりたと思った。

◎近年の似た構造の社会問題について議論する

【デイスカッション】

(エボラ出血熱問題)

- ・差別はおかしいと思うけれど、病気を防ぐためには隔離は必要なのかもしれない。
- ・でも隔離された人は何も悪くないし、その人にも人権はある。
- ・治し方がわからないんだから、しょうがない。
- ・隔離は必要だけど隔離先での扱いの方が重要だと思う。
- ・ニュースを見たけど、なんか悪者みたいな感じがした。
- ・危険な地域に行く日本人が悪いとか迷惑かけるなとか言うのはひどい。
- ・困っているのに助けないで攻撃するなんておかしい。
- ・海外ではどうなんだろう。
- ・感染疑いの人の実家がネットで拡散されるなんて完全な人権侵害だ。
- ・結局ハンセン病の差別から何も変わっていない。

◎◎◎各自が今まで学んだことを元に調べたいテーマを考えてまとめる。

【テーマ毎のグループ学習】

(テーマ一覧)

- ・ハンセン病差別の歴史とエボラ出血熱
- ・全生園での生活と一般市民の生活の比較
- ・患者の闘い
- ・病気を原因とした世界の差別問題
- ・全生園の未来を考える
- ・重監房について

◎◎◎発表会を行う(ここは当初一応二時間としたが、子どもたちに任せている時間のため、結果的に四時間扱いになった。場合によっては何時間になっても大丈夫なように時数は確保しておくとうい。

発表方法・時間は全て子どもに任せた。短いグループで十分、長いグルー

プで七十分ほどの発表時間になった。内容に関しては、模造紙にまとめたグループが四グループ（全生園での生活・世界の差別・患者の闘い・重監房）Q&A方式でやり取りをしていたグループが一グループ（差別の歴史とエボラ）、司会を立ててクラス全体で議論するグループが一グループ（全生園の未来）であった。

へ「全生園の未来」での議論（七十分）

提起 入所者の高齢化が進み、今後入居者がゼロになる日も近くなっているが、その時全生園はどうすればよいだろうか。

- ・差別の歴史を忘れないためにも、全てそのままの状態で保存すべき。
 - ・市も人権の森として残すといっているのだから大丈夫だろう。
 - ・でも都心に近い場所にこんな広い土地があればいろいろできる。
 - ・アウトレットとか工場とかが作られるかもしれない。
 - ・約束してたって政治家は嘘ばかりつくから信用できない。
 - ・市民が「残して欲しい」と思うことが大切。市民がアウトレットの方がいいって思ってしまったらまずい。
- 結論 入所者の思いをみんなに伝えていくことがまず必要。市民を対象にした平沢さんのお話会に参加するようまずは家族に呼びかける。選挙の時は全生園をどうするのかを必ず聞く。自分たちも清掃ボランティアなどで今後も関わり続ける。

⑧担任から出されたテーマについての話し合い（まとめ）

【ディスカッション】

もし目の前に、自分にとって不利益な人が現れた時、その人の人権を守ることはできるだろうか。

- ・状況によるけれど、自信はない。
- ・でもあきらめたらだめだと思う。どんな人にも人権はある。
- ・自分の人権が侵害されても？
- ・自分のことを考えてばかりだから争いや差別がなくならない。みんなが我慢すれば変わる。
- ・俺は自分のことは大事だし、自分にとって困る相手ならなおさら。
- ・だからその考えがだめなんだ。
- ・自分がその人の人権を守れないなら、他の人が守ればいいのでは？
- ・たしかにそれならば可能性がある。
- ・でもエボラやハンセン病みたいな事なら他の人じゃなくてみんなで助

けて人権を守るべき。いじめとかならいじめる人の人権を周りが考える。

- ・ いじめてる人の人権？
- ・ いじめてる人にだって人権はある。悪いことしたからってぼこぼこにしたり追い出すのはおかしいから。
- ・ でも悪い人じゃん。
- ・ 罪を憎んで人を憎まず（ここで「おー」と感嘆の声）

以下略

結論ではないが、最終的にはみんなが自分勝手になつたり無関心になつたりしないで、「もし自分だったら」と考えることで、人を切り捨てるみたいなことはなくなっていくのではないか、みんなの人権を守れるのではないか、という話で議論は終了した。

3. 終わりに

子どもたちは優しく柔軟です。だからこそハンセン病に限らず様々な社会問題を提示すると、子どもたちは驚くほど柔軟にそして真剣に理想を求めて考え、議論してくれます。最近の学校現場は平和教育をはじめとしてデリケートな問題については及び腰になる傾向が見られますが、個人的には「子どもをばかにするな。大人よりよっぽど真剣に向き合う。」と考えています。この仕事は理想を語れる数少ない仕事です。社会に出ると理想だけでは生きていけない現実には直面しますが、少なくとも義務教育段階で子どもたちに理想を提示しなくては、何も始まりません。すべての教員がロマンを大切にし、ロマンチストであることを願ってやみませんし、社会科・総合的な学習の時間はその一端を担うものと信じています。